

ともに生きる

吉井小学校 六年

坂本 一華

（敬称略）

夏休みに入る前に国語の授業で「星空を届けたい」という文章を読みました。その本の作者の高橋真理子さんは、多くの人に星や宇宙を楽しんでもらうため様々な活動をしている人です。

高橋さんは、目の不自由な人にも星空を体験させたいと考えました。私は、星はさわることも音を出すこともできないのにどうやって体験してもらうのだろうと思いました。高橋さんは、たくさんの方の協力を得て、点字で星の明るさを表したり、町の明かりを消した時の「わあ。」という感動を体験できるように工夫を凝らしたりして目の不自由な人にも星空を届けました。目が不自由だとしても、星のことを知ってほしい。一緒に星を楽しみたいという高橋さんの思いにとても感動しました。また、ユニバーサル絵本「ねえおそらのそれなあに？」という本も出していて、本当にすべての人に星空を体験させたいのだと感じました。

同じ頃、ひかりの本で「宙に消えたありがとう」を読みました。ここでは「脳性マヒ」の障がいをもった人が出てきていました。車椅子を押して一緒に出かけていた主人公に対して、駅の階段を上るのを手伝ってくれて人が、「たいへんやなあ。一人で行けるか。」と言ったとき、主人公が「重たい荷物を持って困ってんのとちがうぞ。」と心の中で叫んでいました。障がいをもっている人は、重たい荷物などではなく、車椅子を足にしている。ただ話すのがゆっくりなだけと書かれていて、私はこの言葉や考え方にとても感動しました。

私は、シヨップینگモールで車椅子に乗っている人や目の不自由な人に出会ったことがあります。じつと見ていたら失礼だと思って目をそらしてしまったこともあります。駅の階段で手伝ってくれた人達も、きつと私と同じように考えたのかもしれませんが。でも、これからは「星空を届けたい」や「宙に消えたありがとう」のお話を作った人達のように、「障がい者」という一つのくくりではなく、車椅子を使っていたり、目が不自由だったりするだけの〇〇さんというように、その人個人としてとらえたいと思いました。そして、もしその人が困っていたら助けたいと思いました。

この二つの物語は、どちらも障がいをもっている人達と一緒に歩みたいという作者の強い気持ちが伝わってきました。そして、障がい者のために

してあげるといいうのではなく、自分の関わっている人がどうすれば楽しく
でくれるのか、一緒に楽しく生きるにはどうすればいいのかということ
を一生懸命考えていました。

私もこの人達のように、障がい者だから何か手を差し伸べるとい
うのではなく、様々な個性をもった人たちと一緒に活動できるように工夫す
れば、きっと楽しい世界が広がると考えることが大切なのだと思うよう
になりました。